

日本産業衛生学会九州地方会ニュース

産衛九州

発行所 日本産業衛生学会九州地方会
〒860-8556 熊本市中央区本荘1-1-1
熊本大学大学院生命科学研究部
公衆衛生・医療科学分野
TEL (096) 373-5112
FAX (096) 373-5113

発行責任者：地方会長 加藤 貴彦

(題字：倉 恒 匡 徳 筆)

巻頭言

九州地方会会長就任のご挨拶

熊本大学大学院 生命科学研究部

公衆衛生学分野 加藤 貴彦



この度、川本俊弘九州地方会会長の後任として、地方会長に選出されました熊本大学大学院生命科学研究部・公衆衛生学分野の加藤貴彦です。私は産業医科大学卒業後、産業生態科学研究所、医学部、産業保健学部と産業医科大学内を移動後、宮崎大学を経て7年前から熊本大学に勤めております。また4年前から地方会誌である「産衛九州」の編集委員長を務めさせていただいております。会員の皆様のご支援のもと、これまでの経験を生かして九州地方会の活性化に努力したいと思っておりますので、なにとぞよろしくお願いいたします。

日本産業衛生学会は、会員数が7,000名を超える大きな学会であり、そのなかで九州地方会の会員数は750名近くを数え、東京、関西、中部について4番目の規模となっています。これまで私は日本衛生学会の理事を経験させていただきましたが、比較してみると、産業衛生学会は「産業」が名称の頭についているように、労働者の健康・安全の問題解決に特化した研究・実務に議論の中心があるように思います。現在の九州地方会の主な活動は、年1回の地方会

学会の開催と年2回の地方会誌の発行です。そして九州地方会には、産業医部会、産業看護部会、産業衛生技術部会、産業保健歯科部会の4つの部会があり、それぞれの部会活動が地方会とともに活動しています。

さて近年の学会における学会員は、Jリーグのサッカーチームのサポーターのような役割に変わってきているように思います。つまり学会は、産業保健の対象者である労働者の安全健康の維持・向上に貢献することに対し共通の意思をもったサポーター（会員）の集まりです。もちろん学会員は学会活動を通じ、会員相互の情報交換や研究の推進をめざします。会員のレベルが向上し、全国学会や国際学会で活躍できる人材が育っていくことは学会の大きな目的でしょう。しかし同時に、学会員は産業保健の専門家として、多くの地域産業医や、労働局などの地域行政機関と連携し、地域産業保健活動を継続・活性化していくコーチとしての役割もあると思います。

今後、地方会の財政状況を勘案し、運営等のなかで簡素化できる点については工夫をこらし、一方では地方会活性化の方向については皆様からご意見をいただきながら、地域産業保健活動のレベルアップに努力していきたいと考えております。

活動のおかげと思います。

福岡では昭和32年（1957年）看護協会の第1回事業所保健婦研究会が催され、①企業に働く保健婦の専門性、②法的身分の確立、③保健所、市町村保健婦との連携について、すでに討議されていました。

当学会の中では、昭和57年（1981年）久留米市での第50回日本産業衛生学会で、初の産業看護の自由集会が企画され、翌年正式に「産業看護研究会」が設けられ、全国各地の活動に繋がりができました。九州（福岡）では、伊藤フミ子姉に始まり、池田泰子姉、鈴木美代姉、今村幸子姉、そして福光、日笠理恵さん、柴戸美奈さんと代表が引き継がれています。

研究会では、産業看護のこれからに向けて、①卒後教育、②専門職としての役割を中心に議論、研究がなされ、「産業看護基礎講座」などに発展していきました。

功労賞を頂いて

福 光 ミチ子
(BOOCSクリニック福岡)



5月24日、松山市で開催された第86回日本産業衛生学会総会後の授賞式で、名誉会員となられた河野啓子先生に準じ、功労賞をいただきました。その際の大前理事長の笑顔にホッとした思いでした。

この度の受賞は、先輩諸姉から現役役員に引き継がれた熱意ある

平成4年に産業看護部会となり、平成7年度には3年余の歳月をかけて、産業看護職継続教育システムが構築され、翌年から、そのシステムに則った教育が「基礎コース」や「実力アップコース」として継続的に行われています。私も平成11年から縁があって、教育担当幹事として運営に携わらせていただく中で、地方会会員が参加しやすい九州地方会での講座開催の必要性を感じておりました。

九州地方会では、平成8年に産業看護部会を発足しましたが、平成13年（2001年）には九州地方会の学会を引き受け、開催できたことはこの上もなく大きな経験でした。当時地方会会長であった大久保利晃先生から産業看護職に投げかけられたことですが、看護部会が大きく羽ばたき、

手を繋ぎ、力を合わせ、躍進する機会となりました。その折に部会の代表として学会長を務めることができたことは、皆さんの支えによるものです。

これを弾みに九州地方会において産業看護講座基礎コースなどの各コースを開催することができました。平成23年に九州地方会理事を住徳松子さんへバトンタッチするまで、本当に多くの方がたにご支援をいただきました。この度の受賞は支えてくださった皆様のお陰です。

これからも益々惜しみない向上心と仲間との輪を広めて産業看護の本質に向けて進まれることを信じております。

ご推薦いただいた住徳理事、日笠さん、ありがとうございました。

一言

新任のご挨拶

大森久光

（熊本大学大学院 生命科学研究部 生体情報解析学分野）



平成25年1月1日付で、熊本大学大学院生命科学研究部 生体情報解析学分野（医学部 保健学科）に教授として赴任させていただいております。それまで、同生命科学研究部公衆衛生・医療科学分野（加藤貴彦教授）のもとで、准教授として勤務させていただいておりました。

私は昭和61年に産業医科大学を卒業後、内科、呼吸器内科医として、臨床および基礎研究に従事してまいりました。進行した肺気腫および肺癌の診療に携わり、予防の重要性を認識するようになりました。平成8年より日本赤十字社熊本健康管理センターに勤務させていただくことになり、本格的に産業医学、予防医学、公衆衛生の領域で働く機会を得ました。職域、地域の各種健康診断の実践を積むとともに、健康増進部長として、生活習慣病やメンタルヘルスに関する健康教育にも携わることができました。また産業医としての経験をつむことができ、労働衛生コンサルタントの資格を得ることができました。現在、嘱託産業医として勤務するとともに、労働衛生コンサルタント会熊本県支部副支部長を拝命いたしております。また、熊本産業保健推進センター（現連絡事務所）の特別相談員として、研修業務および研究事業を担当させていただいております。さらに、熊本産業看護研究会の顧問として、熊本県の産業保健師の皆様と勉強させていただいております。

私は、これまで一貫して肺癌、慢性閉塞性肺疾患（COPD）をはじめとした呼吸器系の疾患の予防に力を入れてきました。胸部X線を主体とした肺癌検診から低線量

らせんCTを用いた肺癌検診の実施およびその外来でのフォローアップ、禁煙教室および外来の実施などの1次、2次予防活動を実践してまいりました。

平成19年より熊本大学公衆衛生学教室（加藤貴彦教授）赴任後もCOPDをはじめとした呼吸器系疾患の疫学調査を主体とした研究を行ってまいりました。現職においても、COPDに関する疫学研究を中心に、疾病者および健常者を対象とした血液生化学検査、画像検査および呼吸機能検査などの生体情報を用いた研究を行っております。また、日本人間ドック学会の健診における呼吸機能検査のガイドラインの作成、および日本呼吸器学会の肺生理専門委員会委員として、日本人の呼吸機能検査の基準値の作成にも関与させていただいております。さらに、健康くまもと21の策定に会長として携わらせていただきました。その中でCOPDは重要疾患に位置づけられ、益々啓発が必要な疾患となっています。

これまでの実績をいかして、職域の健康管理に貢献できるように努めてまいりたいと思っておりますとともに、日本産業衛生学会に貢献できるように努力してまいりたいと存じます。今後ともどうぞ宜しくお願い申し上げます。

見える？ 見えない？

大神 明

（産業医科大学 産業生態科学研究所 作業関連疾患予防学）



1970年代の名曲に「天国への階段」という歌があります。原題はStairway to Heavenですが、その冒頭の歌詞は、「輝くもの全て黄金とと思っている女性が居た（There's a lady who's sure all that glitters is gold）」という、輝くもの全て黄金ならず（All that glitters is not gold）という

ことわざの振りです。洋楽ファン、あるいはレッドツェッペリンのファンの方ならご存じの方もいらっしゃると思います。

人は目に見えるものしか信じないとよく申します。「粉じん」に関していえば、そう感じるが多々あります。私は立場上、産業医学の講習をすることが多いのですが、保護具の実習スライドで必ず提示する写真の一つに、タオルを顔に巻いて作業場の掃き掃除をしている画像があります。このスライドでは、タオルマスクでじん肺は防げない（肺胞に達する吸入性粒子は普通のタオルでは防げない）ということをお伝えしようとしています。ご承知のように吸入性粒子は目に見えません。ずいぶん前の話ですが、粉じん作業現場の産業医巡視で、粉じんが舞う作業時には呼吸用保護具を着用し、作業終了時に保護具をはずして、エアガン（ゴルフ場にある靴洗浄のようなもの）で身体や衣服に着いた残りの粉じんを吹き飛ばしていたのを見たことがあります。見かけ上、作業着や素肌は綺麗に清掃されておりましたが、目に見えない吸入性粒子について衛生教育を直ちに行ったことはいうまでもありません。

この「見えないから大丈夫」、「見た目問題ないから大丈夫」という思考は、リスク管理上いつも向き合わなければいけない概念だと思います。少なくとも見えるところから手をつけていく手順は間違いのないと思いますが、見えるところだけ対策すれば終わり、というものではありません。先の例の作業場の名誉のために申しますと、その作業場では粉じん作業はチャンパー内で行い、衛生教育や意識についても決して低くはなかったと思います。しかしながら、「見えない」粉じんに対するリスク管理は、もう一歩進める必要があったわけですね。

リスクコミュニケーションをはじめとして、「現場」で「見えているもの」に限らず「見えない」ものに対してどのようにアプローチすればよいのか、私の場合、いつも壁にぶつかっているような印象があります。

労働者の中で非正規雇用、高齢者雇用の比率が増大していると報道されています。抽象的な言い方ですが、今まで以上に「見えない」部分が大きくなっているのではないのでしょうか？ 産業保健スタッフの数も多い大企業はさておき、中小企業や産業医選任義務のない50人以下の事業所等のこの「見えない」部分に対して、リスクコミュニケーションの問題一つを取っても、産業保健的にどのように実践し、展開していくのか？ 課題は壮大ですが、私にとって一生追い続けても興味が尽きないテーマの一つです。

冒頭に述べた「天国への階段」の終章の歌詞には、「もしよく耳を澄ませば最後にはあの調べが聞こえるだろう」(And if listen very hard, the tune will come to you at last.)とあります。「耳を澄まして現場の声を聞く」というのは、非常に示唆に富んでいて、かつどの分野にも共通する基本的な態度だと改めて思うのです。

教授就任にあたって

堀内 正 久

(鹿児島大学大学院 医歯学 総合研究科
人間環境学講座・環境医学分野)



平成25年1月1日付けで、竹内 亨教授の後任として、鹿児島大学大学院医歯学総合研究科人間環境学講座・環境医学分野の教授に就任いたしました。この紙面を借りて、産業衛生学会九州地方会の皆様に、ご挨拶を申し上げます。

私は、関東で生まれ育った人間ですが、鹿児島の水が合うのか、

鹿児島が最も長く生活する土地となりました。鹿児島大学に入学が決まった時に、小学校時代の恩師から、「堀内君は、西の方が合っている」と言われ、その言葉を頼りに、鹿児島で長く生活しているように思います。土地柄というのはあるように思います。教育関係の学会でも、西の方が、東よりも個人の発想を大事にする傾向があるそうです。恩師の言葉は、そのようなことを意識して言われたとのことでした。人は、環境によって変わりうるということであり、適材適所、その人に合った環境で仕事や生活ができるということが大切のように思います。

私は、医学部を卒業後、橋本修治教授が主宰する旧第二内科に入局し、消化器疾患の面から、病態栄養学を学びました。その後、大学院生として、アミノ酸代謝を専門とする生化学教室の佐伯武頼教授の指導を受け、基礎栄養学としての代謝学を学びました。ドイツ留学の機会に恵まれ、アミノ酸輸送体の脳での役割について研究しました。帰国後は、脂肪酸代謝に関与するカルニチンの疲労病態における意義について研究しました。そのような研究背景を有していましたが、社会医学である環境医学（旧衛生学）教室を主宰する竹内 亨教授に招いていただき、遅まきながら、社会医学を学ぶこととなりました。折しも、メタボリックシンドロームが、巷の話題にもなり、産業保健の領域における勤労者の健康管理として、代謝学、栄養学は重要な研究テーマになってきています。代謝学や栄養学を基盤にして、産業保健領域における健康増進の基礎的エビデンスを蓄積し、社会に対して、より具体的な提言を行っていきたいと考えています。

鹿児島大学は総合大学です。総合大学の強みを生かして、他学部との共同研究も活発に展開したいと考えています。共同獣医学部の先生方と取り組んでいる世界最小ミニブタの睡眠評価モデルの研究は、昨今のメンタルヘルス不調や痴呆症にともなう昼夜逆転現象のような睡眠障害を解析する良いモデルになると考えています。また、個々の脂肪酸の特異的な機能を評価するマウスモデルを用いて、トランス脂肪酸の毒性や多価不飽和脂肪酸の中枢への影響などを

検証したいと考えています。糖尿病も産業保健領域では大きな問題であり、糖尿病の運動指導を運動意欲の面から解析し、行動変容につながる科学的なエビデンスの蓄積に努めたいと考えています。

最後に、産業保健実務への貢献について述べたいと思います。鹿児島県の産業衛生学会会員数は、現在36名ですが、減少傾向にあります。産業保健推進センターや医師会を通じて、産業保健活動の生涯教育に携わっていますので、それらの活動のなかで、会員が増えるような努力をしたいと考えています。そのためには、産業医だけではなく、産業保健に関わる多様な職種の方々である産業保健師、管理栄養士、作業環境測定士、社会保険労務士や労働衛生コンサルタント資格を有する方に加入してもらえようような努力をしたいと考えています。

いずれにしても、まだまだ未熟な若輩であります。産業衛生学会九州地方会の皆様方に、これから様々な場面において、鍛えていただければと思います。今後、九州、鹿児島の産業保健の発展に少しでも貢献することができれば、そのことが鹿児島の地に私自身が生きた証になるのではと思っています。よろしくご指導、ご鞭撻をいただければと思います。

新任のご挨拶

上 野 晋

(産業医科大学 産業生態科学研究所 職業性中毒学研究室)



日本産業衛生学会九州地方会会員の皆様におかれましては、ますますご健勝のことと存じます。

私は産業医科大学産業生態科学研究所 職業性中毒学研究室の上野 晋と申します。平成23年4月1日付で本研究室の教授を拝命し、また平成24年11月1日より日本産業衛生学会代議員を務めさせていただくことになりました。今回、この『産衛九州』に執筆させていただく機会を頂きましたので、あらためて会員の皆様にご挨拶させていただきたいと思います。

私は佐賀県佐賀市の出身で、佐賀県立佐賀西高等学校の卒業です。福岡での予備校生活を経て昭和60年4月に産業医科大学医学部第8期生として入学しました。学生時代はバドミントン部に所属しておりましたが、そのバドミントン部のOBには平成25年度よりこの九州地方会の会長となられました熊本大学大学院生命科学研究部公衆衛生・医療科学分野教授の加藤貴彦先生、平成25年度の九州地方会学会を主催された宮崎大学医学部社会医学講座公衆衛生学分野教授である黒田義紀先生など、この九州地方会で活躍されている先生がいらっしゃいます。

もともと私は医学研究に携わることの方に興味がありま

したので、卒業後は産業医大大学院へと進学し、その修了後は産業医科大学産業医学基礎研究医員、米国コロラド州デンバーにあるコロラド大学ヘルスサイエンスセンターのPostdoctoral fellow、テキサス州オースチンにあるテキサス大学オースチン校のResearch Associateとして基礎医学研究に従事する機会を頂きました。特に米国時代は抑制性神経伝達を担うGABA (γ -アミノ酪酸) の受容体(GABA_A受容体)機能に対するアルコールと揮発性麻酔薬の作用とその機序というテーマの下、GABA_A受容体におけるアルコールの作用部位を、受容体蛋白を構成するアミノ酸レベルで同定する研究に従事しており、これが私の中枢神経薬理学研究の始まりとなりました。

米国から帰国した平成12年4月より平成23年3月までの11年間、産業医大医学部薬理学講座に在籍しておりましたが、米国時代から引き続きGABA_A受容体を中心とした中枢神経薬理学研究を行いながら、産業医大卒業生として産業医学に貢献することを目標に、中枢神経毒性学研究を展開することにも着手して現在に至っています。そもそも欧米ではPharmacology & Toxicologyと並列で表記されることも多いように、薬理学と毒性学というのは本来密接な関係にあるものです。私が米国時代に従事した揮発性麻酔薬に関する研究も、産業現場で使用される揮発性有機溶剤にはこの揮発性麻酔薬と化学構造上類似している部分もあることから、揮発性有機溶剤の中枢神経毒性についての研究に応用できると考えて、フロン代替物質1-ブロモプロパンを初めとして揮発性有機溶剤の中枢神経毒性について、次世代影響までも含めた細胞レベルから個体レベルにわたる評価をテーマに研究を行っています。最近はいPS細胞を用いた毒性評価試験が臨床治療薬の開発の過程では導入されるようになって来ましたが、将来的には産業化学物質の毒性評価にもiPS細胞を導入することが必要になると考えており、私の研究室でも今後iPS細胞実験系を確立していくことを計画しています。

現在、研究室には私に加えて五十嵐友紀講師(産業医大15回生)とDonald Wilson助教(フィジー出身)が在籍しており、毒性学研究ばかりでなく優秀な産業医を育成することにも研究室員一同尽力しています。最後になりますが、産業医学分野ではまだまだ未熟者ですので、すでに活躍されている九州地方会会員の皆様からはこれから沢山のことを勉強させていただき、九州地方会の発展の貢献できるよう務めてまいりますので、どうぞ今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



部 会 報 告

産業衛生技術部会の活動報告

産業衛生技術部会幹事 伊藤 昭 好
(産業医科大学 産業保健学部 環境マネジメント学科)

産業衛生技術部会は、全国レベルの活動として、本年5月に松山で開催された第86回産業衛生学会において産業衛生技術フォーラム(テーマ:高年齢労働者の転倒災害防止を考える~65歳現役社会を迎えて~)を開催しました。高年齢労働者とは、厚生労働省の定義によると、55歳以上の労働者ですので、今後さらに就労人口に占める構成比率は増加するものと予測されます。また転倒災害も、具体的な対策が困難な中、発生数が減少していないのが実情です。フォーラムでは、現場で取り組まれている貴重な事例が報告され、活発に討議が行われ、有意義な時間を共有することができました。さらに来たる9月には、名古屋で開催される産業医・産業看護全国協議会の会期中に、同じ会場で第22回産業衛生技術部会大会開催を予定しております。この他、産業衛生技術専門研修会をフォーラムや大会開催時に合わせて、年2回開催しております。

各地方会単位でも、独自に研修会等の企画運営を進めていますが、九州地方会では、宮崎市民プラザで開催された平成25年度日本産業衛生学会九州地方会学会に合わせて7月6日に自由集会を開催しました(写真参照)。今回は、産業医科大学産業保健学部環境マネジメント学科の熊谷信二先生に、「オフセット印刷業における胆管がん発症事件を通じて考えたこと」という題目で講演していただきました。昨年の学会において、熊谷先生が当該事例について初めて報告されたことが大きく報道され、社会的事件となったことはご存知と思います。今年になって、労働災害として認定され、学会の許容濃度等勧告にも原因物質等が新規提案されたことは記憶に新しいところです。先生には、その後の国際学会での討議の報告も交えて、この事件との出会いとなった経緯などについても話していただきました。この集まりには、筆者の所属する環境マネジメント学科卒業の作業環境測定士も参加して、若手産業衛生技術者への良い啓発の機会となりました。このような機会を今後とも継続して持ちたいと考えております。



産業歯科保健部会報告

産業歯科保健部会幹事 山本 良子
(日本予防医学協会 九州事業部)

風薫る5月、坊ちゃん鉄道がのどかに走る松山において、第86回日本産業衛生学会総会が開催されました。今回はエイジマネジメント研究会と産業歯科保健部会の合同企画でシンポジウムを開催しました。「これからの健康科学」ー産業保健におけるエイジマネジメントストラテジーーという高齢社会に直面したテーマであり、各分野でご活躍の先生方のご意見を伺う貴重な機会でした。

エイジマネジメントの観点から樋口善之先生(元産医大人間工学・現福岡教育大学)には、「元気の労働者の特徴は何か?」というテーマで、労働適応能力についてご講演いただきました。

医科・歯科学の立場から小坂 健先生(東北大学国際歯科保健学教授)「健康は個人の努力でなされるもの?」では、ネットワークに関連した健康度や傾向(例えばデブの友人はデブ)そしてネットワークを通じた介入の可能性まで興味深いご講演内容でした。

歯科衛生士の立場からは、白田千代子先生(東京医科歯科大学)「働き盛り世代に求められる健康力とは?」。看護の立場から畑中純子先生(四日市看護医療大学)「ストレス時代にいきいきと働きつづけるために」をご講演いただきました。

指定発言では、神代雅晴先生(日本予防医学協会)より、高齢社会に対応し健康資源を確保するために、エイジマネジメントを多面的かつ戦略的に考え取り組むことを提言されました。



産業歯科保健フォーラム「健康寿命を延ばす産業保健」では、食生活・食行動を切り口にメタボリックシンドローム対策をテーマとし、平成25年度産業歯科保健部会前期研修会では、テーマ「ヘルスリテラシーを活かした新たな健康支援」として、順天堂大学の福田洋先生にご講演いただきました。

秋の名古屋で行われる全国協議会では、「メンタルヘルスとデンタルヘルス」のテーマでシンポジウムを行います。味覚障害や舌痛症、口腔乾燥などメンタルとデンタルとの関係を4人の先生方にご講演いただきます。興味深い話題かと思っておりますので是非ご参加ください。

「福光ミチ子氏日本産業衛生学会功労賞 受賞記念祝賀会」を開催いたしました

公益財団法人 福岡県すこやか健康事業団
柴戸美奈

第86回日本産業衛生学会におきまして前日本産業衛生学会九州地方会産業看護部会長の福光ミチ子氏が功労賞を受賞されましたことを記念して、平成25年6月1日に福岡市内のレストランにて産業看護部会主催の祝賀会を開催いたしました。大久保利晃名誉会員をはじめ歴代の産業看護部会の幹事の皆様、日頃よりご支援を賜っております産業医の先生方など26名様の参加がありました。

初代九州地方会産業看護部会長の鈴木美代氏の祝辞での、「九州こそが産業看護の発祥の地であった」という言葉に、後進の身として重責に身震いがする思いでした。懐かしい先生方と楽しく勧談をしながら、産業看護部会の役員会に参加するようになったころ、諸先輩方の熱い議論を聴きながら産業看護への熱意を感じ「保健師はこんなに信念を強く持って働くものなのだ。」と圧倒されていたことを思い出しました。

日本産業衛生学会の産業看護部会は平成4年に設立されましたが、九州では昭和45年には福岡県看護協会事業所保健婦研究会が発足し、昭和52年の第50回日本産業衛生学会（久留米）で初の産業看護の自由集会が開かれています。このような歴史ある産業看護部会の活動の中で福光前会長は平成13年に看護職としては初の九州地方会学会会長を務め、また産業看護部会の本部で行われてきた産業看護基礎コースや短縮Nコースの開催など全国に先駆けて行い、九州における産業看護職の教育に尽力されました。全国的にも有名になっている九州地方会産業看護部会の組織力は、福光氏のリーダーシップの下、それらの活動を通して培われたものと自負しております。学会が公益社団法人となり部会活動も変遷の時期を迎えていると感じておりますが、現部会長として今後とも魅力ある部会活動となるよう努力していきたいと考えています。

産業保健現場において産業看護職が活躍する場は多様化し、産業看護の基礎教育および現任教育も変化しています。保健師・看護師のそれぞれの専門性を強化すべく、日本産業衛生学会産業看護部会産業看護職継続教育システムも見直しが行われています。部会員の皆様には詳細が決まり次第、広報を通じて随時お知らせをいたします。

平成25年度の九州地方会産業看護部会では10月に実力アップコースを1月には産業看護研究会等の研修会の開催を予定しております。多数の学会員の皆様の御参加をお待ちしております。



産業医部会活動報告

九州地方会産業医部会長 小田原 努

九州地方会での産業医部会が活動を始めて10年が経過しました。平成24年度からは各県から幹事が選出され、九州が一体となった活動を期待できる体制となってきました。平成25年度に新しい役員の体制となり、新メンバーの活躍も期待されているところです。

ところで、地方会産業医部会主催の研修会として昨年度は新たな企画として日本労務学会と連携し、2013年3月9日に日本産業衛生学会・日本労務学会合同研究会（日本産業衛生学会九州地方会第27回健康管理研究会・日本労務学会九州部会第24回研究会）を開催しました。「メンタルヘルスにおける労務上の課題」をテーマとして主にメンタルヘルス不調への対応を要因別に層別化して多様な対応のあり方を議論しました。日本労務学会から西村慶治先生（西村慶治事務所）と廣瀬晴生先生（M&Cラーニング）を講師に迎え、キャリアデザインやマネジメントの視点から職場のメンタルヘルス問題についてお話いただきました。日本産業衛生学会からは小田原が産業保健現場での労務上の諸問題とその対応について話しました。引き続いて日本労務学会の福谷正信先生（立命館アジア太平洋大学）に進行役をお願いし、西村先生、小田原、廣瀬先生に登壇していただき、パネルディスカッションを行いました。参加者総数は75名で盛会となりました。



昨今のメンタルヘルス対応は労務関係者との密接な協力なしに解決できない問題が多く、参加者からの質問も多岐にわたり、関心の強さがうかがえました。

本年度からは、健康管理研究会の名称を改め、九州産業医部会研修会として研修会を開催していく予定です。産業医部会としての主体性を明らかにし、責任を明確にするためです。但しこれまでの産業看護部会との良好な協力関係も引き続き継続していくため、できるだけ共催を検討していく予定です。

最近の産業保健が、ややもすると行政の後追いになり、今まで地道に行ってきた活動が二次的に評価される傾向がでてきています。現場の声をきちんとした形にするためにも産業医部会会員を増やし、他のセクションと共同しながら活動していくことを今後の産業医部会に求められていると思います。そういう観点からも単なる研修会だけではなく、ワークショップや討論会なども行っていくことも必要と思っています。

更なる産業医部会の発展のために、皆様のご協力をよろしくお願いいたします。

研究紹介・学会報告

平成25年度九州地方会学会報告

黒 田 嘉 紀

(宮崎大学 医学部 社会医学講座 公衆衛生学分野)

平成25年度日本産業衛生学会九州地方会学会をさる平成25年 7 月 5 日と 6 日の両日、宮崎市の市民プラザにおいて、皆様からの多大なるご協力をいただき無事開催することができました。まずはこの場をお借りしてお礼申し上げます。思い起こせば平成16年に宮崎で開催された前回の地方会学会(学会長:加藤貴彦 現熊本大学教授)は、大雨にたたられ多くの方々にご不便をおかけしました。九州ではこの時期、梅雨は未だ明けず、大雨となることが多いため、今回の地方会学会も開催にあたり、とにかく天候が最も気に病む事柄でした。開催数日前には夕暮れ時から大雨となり、天気予報等からも当日も雨天となることを覚悟しておりましたが、予想に反して好天に恵まれ、会員の皆様にご迷惑をおかけすることなく開催できましたことがなによりでした。

今回の地方会学会は、100名強の参加者お迎えし、教育講演、特別講演と25題の一般演題にて開催いたしました。初日には16題の一般口演において、就業現場におけるストレス及び有害化学物質と健康障害等に関して活発な討論がなされ、その後の教育講演では大分大学医学部精神神経医学講座教授の寺尾岳先生をお招きして、最近特に注目されている新型鬱病とのつきあい方について御講演いただきました。

2 日目は 9 題の一般口演と、その後に宮崎大学医学部生命・医療倫理学分野の板井孝彦教授に研究倫理をめぐる最近の動向と題してお話しいただき、疫学研究を行う上で配慮すべき倫理的事項について専門的立場から多くのサジェッションを頂きました。また一般口演においても初日と同様に活発な討論がなされました。

交通の便が必ずしも良くない宮崎県ではありますが、多くの方々にお集まり頂き、何とか天候にも恵まれ、滞りなく地方会学会を開催することができました。これもひとえに会員の皆様のご協力とご支援のたまものと感謝いたしております。最後になりましたが、今後も益々この会が発展しますことを祈念し、地方会学会の報告といたします。

学 会 案 内

平成26年度九州地方会のご案内

堀 江 正 知

(産業医科大学 産業生態科学研究所 産業保健管理学教室)

平成26年度九州地方会は、平成26年 6 月20日(金)及び21日(土)に、産業医科大学のラマツィーニホール(電話 093-603-1611(代表))で開催する予定です。岡山市で行われる総会(5月21~24日)の1ヵ月後になります。日程は次の通りです。

演題×切:平成26年 4 月20日(日)

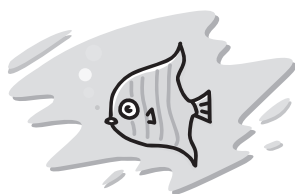
抄録×切:平成26年 5 月20日(火)

地 方 会:平成26年 6 月20日(金)・21日(土)

産業医科大学の最寄り駅は、JR折尾駅です。日本最古の立体交差駅ですが、現在、大正 6 年築の駅舎を解体中で、来年も工事中の予定です。昨年、新たに設置された「北口」にバス発着所やタクシー乗り場があります。駅から会場まで、徒歩では20分余りです。

例年通り、全員で聴いて討論する形式による一般口演を2日間に分けて行う予定です。また、1 日目の午後に理事会と特別講演を行い、2 日目の午前に教育講演を行う予定です。1 日目の夜は、楽しい懇親会を企画中です。九州、沖縄、韓国からも多くの皆様に北九州までお越しいただけますよう、参加費や懇親会費はなるべく安く設定したいと考えています。ランチョンセミナーを開催いただける企業を探していますので、ぜひご紹介ください。自由集会を開催されるご希望があれば、会場を用意したいと考えますので、平成26年 4 月20日までに事務局宛にお知らせ下さい。

事務局は、当教室(電話:093-691-7407、FAX:093-601-6392、e-mail:j-shkkan@mbox.med.uoeh-u.ac.jp)が担当します。事務局長は准教授の井上仁郎(じんろう)です。また、ホームページを開設しました。今後、こちらに最新情報を公開して参りますので、どうぞご期待下さい。

<http://>www.uoeh-u.ac.jp/kouza/sanhoken/h26sanei/index.html

理事会報告

平成25年度 第1回九州地方会理事会報告

平成25年度第1回理事会が、平成25年7月5日(金) 13:00～14:00に宮崎市民プラザ4階中会議室にて開催されました。

主な議題は以下の通りです。

- 1) 平成24年度第2回理事会議事録要旨について
- 2) 平成24年度事業報告及び決算報告について
- 3) 平成25年度事業計画・予算について
- 4) 平成25～26年度役員について
- 5) 平成26年度地方会開催について
- 6) 平成27年度地方会開催地について
- 7) 名誉会員、功労賞の候補者について
- 8) その他

平成26年度九州地方会開催に関しましては、平成26年6月20日～21日に産業医科大学ラマツィーニホールで産業医科大学 堀江正知教授を学会長として実施することが報告されました。

編 集 後 記

巷ではスマホ(スマートフォン)が主流になりつつあり、私を含むガラケー(ガラパゴス携帯=折り畳み式携帯電話)派にとっては肩身の狭い今日この頃です。しかし、一方ではフェイスブックやツイッターなどSNSからの企業情報流出のニュースや炎上騒ぎが後を絶たず、SNSは「バカ発見器」とも揶揄され、ユーザーのメディアリテラシーが問われています。最近ではLINEと言われる無料メールサービスが急速に普及し、スマホユーザーの若者の大半が利用しています。先日、弊社で取引業者の労災が発生し、緊急安全衛生委員会が開催されている最中、被災者の受診に同行していた取引業者社員から、私の隣にいた若手の会議参加者にLINEで受療状況のメールが届き、正規の報告より「LINEの方が早くね?」と言った状態となっていました。さすがに弊社にはメールで欠勤を知らせてくる社員はまだ現れていませんが、メンタルヘルス不調で休業している社員と私の連絡手段も、数年前から携帯メールが中心となっています。社員にとっては電話よりハードルが低く、私にとっては確実に連絡が取れる手段として、お互いに重宝し

ている現実がありますが、ネットで社員とどこまで『繋がる』かの判断が、年々難しくなっているように感じます。

産衛学会もジャーナルへの投稿がWEB化され、来年の選挙もインターネット投票となる予定であり、IT化が着実に進んでいます。地方会でのネットの有効活用は今のところ未知数のようです。一昨年から理事を務めるようになり、私の手元には全国の地方会ニュースなどが送付されてきますが、『産衛九州』をはじめとする地方会ニュースや各部会の会報誌はいずれも紙媒体で、題字は各地方会や部会を代表される著名な先生が担当されており、ノスタルジック漂う雰囲気の中に長く引き継がれてきた歴史を感じます。お目にかかったことのない地方会の会員の方の投稿や、地方会の特徴が表れた記事を拝読するたび、わざわざ手元に送られてくる意味とその効果を感じざるを得ません。この『産衛九州』を職場や自宅で手に取られている皆様も、ツルっとした冷たい手触りとは逆に、執筆者や編集者のみなさんの熱い思いを感じながらご覧になっていることと思います。これからも、『産衛九州』が九州の皆様にも長く愛される地方会誌であることを編集委員の一人として願っております。

(住徳)

九州地方会ニュース「産衛九州」

発行 平成25年9月1日

編集正責任者：加藤 貴彦(熊本大学)
編集副責任者：市場 正良(佐賀大学)
編集委員：青木 一雄(琉球大学)
青柳 潔(長崎大学)
石竹 達也(久留米大学)
黒田 嘉紀(宮崎大学)
佐土原浩子(九州電力 大分支店)
住徳 松子(アサヒビール(株)博多工場)
堀内 正久(鹿児島大学)
大和 浩(産業医科大学)

(五十音順)

(編集事務局連絡先)

〒860-8556 熊本市中央区本荘1-1-1
熊本大学大学院生命科学研究部
公衆衛生・医療科学分野(担当：西村)
TEL(096)373-5112 FAX(096)373-5113
E-mail: k-public@kumamoto-u.ac.jp